小渡セイゴ水辺愛護会

調査団体名　：　小渡セイゴ水辺愛護会
設立年　：　2008年
団体URL　：　なし
活動拠点　：　小渡地区の矢作川（左岸）
取材日　：　2017年12月13日(水)

団体代表者名　：　鵜居利行
対応してくれた人の名前　：　鵜居利行

調査員　：　浅田益章、吉橋久美子
レポート作成者　：　吉橋久美子

活動内容

市内に19ある「水辺愛護会」の一つとして、2008年から活動を開始。矢作川上流部の小渡町内（“セイゴ”は地名）で竹が繁茂した河畔林や、竹で見通しが遮られていた県道沿いを明るくするため、竹の間伐・枯れた竹の運びだし等を行っている 。

約50名ほどが会員登録しており、作業日には10数人～20人程度が参加して、暑い夏も寒い冬も、大変だが毎月活動している。伐った竹はまちのお祭りや行事などで活用している。「小渡やな」の竹も活動地から持って行ってもらっている。

キャッチフレーズ

県道沿いの景観をきれいにし、竹林がヤブ化しないように整備を地道にコツコツ行う。

会のモットー（何を大切にしているか）

・地域がヤブ化してしまわないよう、整備をする。
・県道沿いを明るくしたい。
・会員同士の親睦、コミュニケーション。
・竹の活用。
・身体を動かして健康に。

設立から現在に至るまで変化したこと

最初の2～3年は竹を伐ることに集中したが、竹を伐るばかりではね、と、子どもたちと交流を始めた。竹を飯盒にしてご飯を炊いたり竹細工を教えたりしてきた。しかし子どもも忙しく、その後続いているわけではない。地元の行事で竹を活用してもらうようにしている（竹灯篭、竹のたいまつ）。地元のイベントや市からの要望で竹を提供することもある。また、ここ数年は竹皮ひろいもやっている。

これらの活動の結果、竹が生い茂り、倒れ、真っ暗だった河畔林が、明るい広場や明るい林となった。県道からの眺めを遮っていた竹も伐ったので、対岸への見通しがきくようになり、ドライバーからも明るくなったと感謝されている。路面にも日が差すようになり、冬の凍結した路面が溶けるのが早くなったようだ。

連携している団体・専門家・自治体など

愛知工業大学、愛知学泉大学、豊田市。

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動（例：小仕事づくり、地域資源の活用など）

・若い人たちが主催する行事にも竹を提供している。その時に一緒に作業をしてもらう。
・活動地を利用しやすいように整備しておく。
・次の世代にも愛されるように、川沿いにハナモモやヒガンザクラなどを植樹している。
・近隣の団体との交流。横の交流をすることでいいところは取り入れ、学びあう。

現在直面している課題

・会員の高齢化。
・一回切っても竹はまた繁茂してしまう。整備した後草刈りの面積が広くなって大変である。
・年間通して、色々な行事が多く負担が大変（伐採活動は重労働である）。

今後やってみたいこと

・外部の人と交流を深めたい。都会からくる人が増えてほしい。
・企業ボランティアと一緒に活動を推進したい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

・小渡は観光のまちづくりを進める方向だろう。商店街にがんばってもらって活性化してほしい。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞
小渡はどんなまちですか？
＜答え＞
　矢作川で材木や竹を筏にして流していたころ、隣接する時瀬町が山から筏を出す基地となっており、小渡の町は「遊ぶところ」として大変な賑わいだった。映画館もパチンコ屋もなにもかもが揃っていて「“小渡”か“江戸”か」というくらいだった。
　しかし筏流しがなくなり、勤め人が増え、子ども世代はまちへ。今は人口が減ってしまっている。
　それでも水辺愛護活動の他にも、小渡城跡を巡る歩道の整備、県道の整備、そしてさまざまな行事など、まちをよくするためにみんなで頑張っている。

その他、伝えたいこと

・川は宝物だと思っている。ダムができて水量が減り、川底が掘られてしまっているが…。
・小渡セイゴ水辺愛護会の会員の多くは、上記のように他の活動も行っているので大変だが、無理をせず、コツコツとやっていきたい。
・15年前に夢かけ風鈴まつりを立ち上げ、少しでも多くの人に小渡に来ていただくまちづくりをしている。若い人たちと今後も力をあわせて進める。
・少し下流の河川敷に沈下橋でもよいので橋ができるとよい。

写真

取材風景
（鵜居さん：左）

活動風景（2016年12月撮影）